



第 14 回

「太陽の塔」

おかもと たろう
岡本太郎

鉄筋コンクリート、塗料他 高さ約70m
1970年 万博記念公園(大阪府)

※「美術2・3」P.100に掲載

太陽の塔について

太陽の塔は、大きい。

この世界には、太陽の塔を見たことがある人と、太陽の塔をまだ見たことがない人がいて、まだ見たことがない人が想像するよりもはるかに、太陽の塔は大きい。そして、太陽の塔を見たことがある人にとっても、もう一度見ると、それは思ったよりも大きくて、必ず驚いてしまう。

モノレールの万博公園駅を出ると、太陽の塔が見える。万博公園の森の真ん中に、飛び抜けて立っている。万博の期間中は、天辺の金色の顔の真ん中にある二つ目が光って、ビームのように照らしていたというのだから、どれほど迫力があっただろう。

近づくにつれて、その大きさはますます、こちらにのしかかるように、迫ってくる。太陽の塔は、高いし、太い。こんなに太いとは思わなかった、と正面だけでなく横や斜めや、すぐそばや少し離れたところから見て、感じる。この大きさを支えるためにはこれだけの太さが必要なのだが、その太さがかえって奇妙なほどの威圧感を生み出してもいる。

真下までくると、左右に突き出た角のような腕が大きいのに圧倒される。なぜあんな大きくて重いものがくっついているのか、不思議で仕方

ない。真っ青な空に、巨大な腕が浮いている。なんなのだ、これは、と思わずにはいられない。

太陽の塔には、顔が三つある。正面の真ん中にある「現在」を表す顔は、はっきりと力強く、天辺の「未来」の顔は赤ちゃんのように幼い。裏側の「過去」を表す顔は、遠目からは塗り分けられただけに見えるが、下から見上げると、立体的なのがよくわかる。深い色のそれは、見ているうちに吸い込まれそうになる。もう一つ、内部の地下にも顔があるのだが、わたしはまだ見たことがない。内部は真っ赤で、人類の歴史が表されている。

万博が開催されているとき、いくつものパビリオンが立ち、信じられない数の人で賑わい、その中心で広大な屋根を突き破るように、太陽の塔は立っていた。その賑わいが消え去った跡に、今は、なだらかな芝生の丘と再生した森が広がる。太陽の塔だけが、同じ場所で立っている。万博公園のいろんな場所から、見える。背中から首にかけての曲線(ちょっと猫背に見える)、子供がよろこんでいるように天に向けられた腕。真っ白に輝く表面。なんだろう、これは、と思う。

柴崎友香
しばさきともか

1973年、大阪府生まれ。作家。
2000年、『きょうのできごと』でデビュー。
『寝ても覚めても』で第32回野間文芸新人賞、
『春の庭』で第151回芥川賞を受賞。
その他、『パノララ』『かわうそ堀怪談見習い』
『千の扉』『公園へ行かないか? 火曜日』
『つかのまのこと』など著書多数。
2018年、『寝ても覚めても』が映画化(濱口竜介監督)。